2 同定依頼を受けたハエ症の記録
篠永 哲 (東医歯大・医・医動物)
Records of the myiasis causing flies
identified from 1990 to 1997
Satoshi Shinonaga

最近、寝たきり老人、心身障害者、悪性腫瘍の患者などの間に、偶発性のハエ症の増加の傾向がみられる。演者は、過去に多数例のハエ症の原因となったハエの同定依頼を受けてきた。ここでは、これまでに記録しておいた症例から、1990年から1997年までの約30症例について検討する。

ハエが寄生していた部位は、悪性腫瘍の患部（頭部、四肢、躯幹部など）、口腔内、眼窩、外耳道、陰部などで、年齢的には高齢者が多いが、新生児の場合もあった。ハエの種類では、ヒロズキンバエが最も多く、9例あった。ついでナミクバエが6例とセンチクバエが5例であった。コガネキンバエの症例は、老人が森の中で道に迷い、怪我をしてその傷口に産み付けられたものである。この他、ブラジル旅行の際に寄生を受けたヒトヒフバエ症も2例あった。

4 センチクバエに見られる囲蛹殻形成時間の地理的変異
* 森林敦子、林利彦、主藤千枝子、倉橋弘 (国立感染症研、昆虫)
Geographical variation on the time of puparium formation in
Boettcherisca peregrina. A. Moribayashi, T. Hayashi, C. Shudo
and H. Kurahashi.

一般的に囲蛹殻形成時間は、休眠性のあるニクバエにおいて短日下の休眠誘導条件下においては、同温度の長日下より長くなると言われている。実際休眠性を示す東京コロニー Bp (Tokyo) は、短日下では長日下のものより囲蛹殻形成時間は長い。しかし今回赤道直下の南緯0度56分のインドネシアのスラウェシ島より得たコロニー Bp (Luwuk) は、短日条件下で50%囲蛹殻形成時間が35時間、長日条件下で52時間であり長日下の方が17時間も長いという事がわかった。この結果と今まで得られているコロニー、スリランカ Bp (forest) とニューカレドニア Bp (NC) の囲蛹殻形成時間の結果を比較した。そして各コロニーの採集地の日長条件とから休眠性の関連を検討した。

3 虫刺症の2例
○ 大滝倫子 (九段坂、皮膚科)、篠永 哲
(東医歯大、医動物)、元木 貢 (アベックス)
Two cases of arthropod bites
Ohtaki N., Shinonaga S. and Motoki M.

症例1：49歳、男性、旅行案内業者。

初診は平成7年7月13日。バブアニューギニアで同行の8割が“虫”に刺され、その半数に拡大する紅斑を生じたと言う。初診時、右そけい部より大腿部に広がる1~1.5cm 巾の環状の紅斑を認め、発症後約20日で消退。リンパ節腫脹、発熱はない。

*Borrelia burgdorferi*に対する抗体価は陰性。

症例2：73歳、女性、無職、杉並区在住。

初診：平成9年7月23日。自宅の床下にタヌキが巣を作り出産したという。初診の約一週間前にタヌキの親子を追いついて以来、下肢を中心に皮疹を生じた。持参の虫はネコノミと同定された。屋内、床下、庭を殺虫剤で処理後、皮疹の新生はない。なお、近隣でコダヌキが3匹捕獲されたという。

5 イエバエ消化管内における腸管出血性大腸菌 O157 の消長

○ 佐々木年則¹⁾・小林睦生¹⁾・田村和満²⁾・渡邊治雄²⁾・安居院宣昭¹⁾ (国立感染症研究所・¹昆虫医科学部、²細菌部)
Viability of enterohemorrhagic *Escherichia coli* O157: H7 in the alimentary canal of housefly.
Sasaki T., Kobayashi M., Tamura K., Watanabe H., and Agui N.

1996年には我が国において腸管出血性大腸菌 O157 による集団食中毒が多発した。しかし、原因食品が明らかになった症例は少なく、感染経路については不明な点が多い。一方、同年に佐賀県において患者発生施設内で採集されたイエバエ9頭より患者と毒素型および血清型が一致した O157:H7 が分離された。ハエ類は以前より赤痢菌など多くの消化器系感染症の病原体を伝播することが知られている。演者らは今までに、O157 を摂食感染させたイエバエの消化管では3日間、そ嚢では4日間 O157 が検出されることを明らかにした。そこで消化管内での O157 のより詳細な消長を知る目的で、消化管抽出物による影響について検討した。その結果、O157 の増殖がやや促進されることが判明した。さらに、摂食感染後1および3時間の排泄物中の菌数を調べたところ、1回の排泄物中に1万個以上の O157 が検出された。これらのことからイエバエ消化管内で、O157 はほとんど死滅することなく排泄されることが示され、イエバエは O157 の機械的伝播者としての可能性が強く示唆された。